



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

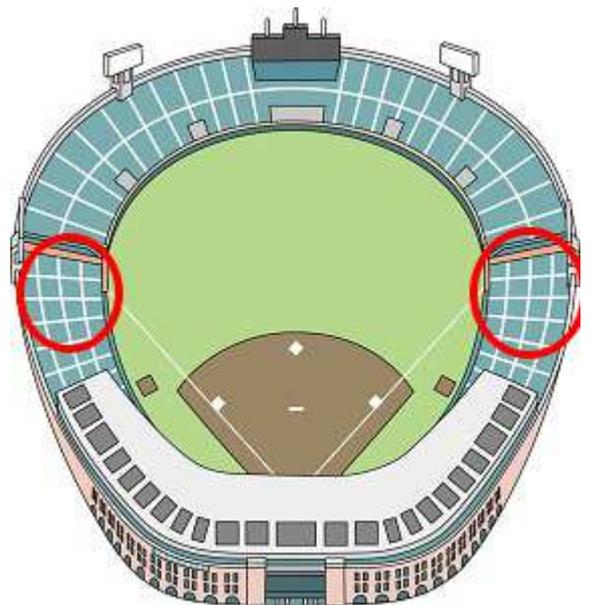
1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004年に退職。Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



なぜアルプススタンドというのか

甲子園球場には「アルプススタンド」と呼ばれる観客席がある。なぜ「アルプス」なのか？

甲子園は増え続ける観客に対応するため、昭和4年(1929)夏に観客席を増設した。その席が応援する人たちの白シャツで埋め尽くされた光景から、漫画家の岡本一平(岡本太郎の父親)が「そのスタンドはまた素敵に高く見える、アルプススタンドだ、上の方には万年雪がありそうだ」と朝日新聞に漫画を描いて以来、「アルプススタンド」と呼ばれるようになったという。



重複は「ちょうふく」or「じゅうふく」

「重複」の読みは「ちょうふく」と「じゅうふく」のどちらでもよい。元々は「ちょうふく」の読みだったが「じゅうふく」(本来は誤用)と読む人が徐々に広まって一般化してしまったものである。こうした読みを慣用読みという。こうした例は相殺(そうさい→そうさつ)、固執(こしゅう→こしつ)、追従(ついでしょう→ついでじゅう)、貼付(ちょうふ→てんぷ)、直截(ちよくせつ→ちよくさい)などけっこう多くある。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

一方で慣用読みがほぼ定着してしまい、本来の読み方を駆逐してしまうこともある(国語辞典の中では健在だが)。こうした例には捏造(でつぞう→ねつぞう)、堪能(かんのう→たんのう)、稟議(ひんぎ→りんぎ)、宿命(しゆくみょう→しゆくめい)、漏洩(ろうせつ→ろうえい)、掉尾(ちょうび→とうび)、詩歌(しか→しいか)などがある。

小澤征爾の名前の由来

世界的な指揮者、小澤征爾は昭和10年9月満洲奉天(現在の瀋陽市)生まれの82歳。父の小澤開作は歯科医師であり、満洲国協和会創設者の一人で、板垣征四郎、石原莞爾と親交があった。このため、板垣と石原の名前から一字ずつもらい「征爾」と名付けたのである。

なお、板垣征四郎の最終階級は陸軍大将、戦後東京裁判にて死刑判決を受け処刑された。石原莞爾の最終階級は陸軍中将。天才肌の軍人だったが、東條英機との対立から昭和16年3月予備役に編入された。

クラーク博士のその後

『少年よ大志を抱け』。あまりにも有名な言葉を残したクラーク博士だが、彼がその後どういう人生を歩んだのか、ほとんど知られていないようだ。

クラーク博士は明治9年(1876)札幌農学校開校と同時に初任教頭に就任し(マサチューセッツ農科大学の学長であり、1年間の休暇を利用して訪日していた)、専門の植物学だけでなく、自然科学一般を英語で教えた。

8か月の札幌滞在で離日、帰国後マサチューセッツ農科大学学長を辞任し、洋上大学の開学を企画するも失敗、さらに鉱山会社を設立し、当初は利益を上げたものの、その後破産してしまった。社会的信用を失い、1886年失意のうちに心臓病のため亡くなった(享年59)。死の間際、「札幌で過ごした8か月こそ、私の人生で最も輝かしい時だった」と言い残したと伝えられている。





長期投資仲間通信「インベストライフ」

世界一短い手紙を書いたのは？

世界一短い手紙を書いたのは、フランスの作家、ビクトル・ユーゴー(1802年～1885年)だ。ユーゴーは1862年に出版した小説『レ・ミゼラブル』の売れ行きが気になり、海外旅行中に出版社宛てに手紙を書いた。そのときの文面が用紙の真ん中に「？」だけだった。彼はこの一字で、「本の売れ行きはどうだい？」という気持ちを表わしたのである。

すると、間もなく出版社から返事が届いたが、それもたったの一字で「！」だった。これはつまり「すごい人気だ！おめでとう！」というわけ。何ともユニークでユーモアのある手紙のやり取りだ。

なお、日本一短い手紙は、徳川家康の家臣、本多作左衛門が陣中から妻に宛てて送った「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」と言われている。

富士通(社名の由来)

富士通は1935年(昭和10年)、現在の富士電機(株)の電話部所管業務を分離し、富士通信機製造(株)として設立され、1967年に現在の「富士通」の社名となった。富士山を連想させる社名だが、実は富士山とはまったく関係がない。

かつての母体であった富士電機の社名は、同社が古川電気工業とシーメンス社との合併で設立されたことに由来しており、「古川」の「フ」と、シーメンス社のドイツ語読みの「ジーマンス」の「ジ」をつなげ「フジ→富士」と名付けられたものである。